

オランダ人画家が「創造」した南アメリカの風景

Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band

チュルリョーニスの楽園

「おまえの口に口づけしたよ、ヨカナーン」

The Young Lady with the Shiner

クリムトのお休み前の『接吻』

アッシジの聖フランチェスコ「サルヌール峠を越えるボナバルト」

「TAKESHIMA」(2009) 愛知県蒲郡市

イギリスで議会制民主主義を思う

レオン・スピリアールト「めまい」

わたしの好きな絵

陶芸家バーナードリーチのデッサン画

眩しすぎる日明かり

Art is my GPS

執筆者一覧 (五十音順)

フランス語学科	伊藤 達也	世界共生学科	鈴木 茂
国際日本学科	エリス 俊子	教職センター	竹下 裕隆
事務局長	太田 恵雄	世界教養学科	沼野 充義
英米語学科	岡田 新	世界教養学科	福田 真人
教職センター	加藤 滋伸	英米語学科	真崎 翔
学長	亀山 郁夫	現代英語学科	ムーディ 美穂
フランス語学科	木内 堯	現代英語学科	吉見 かおる
国際教養学科	後藤 希望	フランス語学科	Anne-Claire CASSIUS
中国語学科	小堀 慎悟	現代英語学科	Alessandro G. Gerevini
現代英語学科	佐藤 雄大	言語教育開発センター	Camilo Villanueva
世界教養学科	白井 史人	英米語学科	Mathew White

contact aux sels d'argent (8,5 x 5,9), BNF.

私の好きな絵——モネ「ロンドン国会議事堂」

若冲の鸚鵡図

伊藤達也

今日の状況から伊藤若冲の鸚鵡図を好きになろうとしている。

なぜ鸚鵡図なのか。同じ若冲の花鳥図なら鶏の絵の方が遙かに出来が良いではないか。確かにそうだが、この場合、理由は写実性よりもその象徴性にある。西洋では、鸚鵡は言葉を話す動物として、特別な意味を持ってきた。ジュリアン・バーンズは小説『プロペールの鸚鵡』で、プロペール晩年の短編『純な心』に登場する鸚鵡は言葉を話すという理由から、小説家のメタファーとなっていると指摘している。今日では、言葉を模倣する鸚鵡はむしろ外国語学習者のメタファーとなるのではないか。

国内外に散らばる若冲の複数の鸚鵡図のうち、とりわけ興味深いのは、千葉市美術館に収められた鸚鵡図である。頭上の羽を逆立たせ、裝飾された止まり木に止まった一羽の真っ白な鸚鵡が、顔を左に向け丸い左目だけでこちらを見ている。鸚鵡の羽毛には一本一本が立体的に見えるように、地の色が塗り残されているのか、あるいは地と同じような色が上から塗られているのか、写実的な技法が凝らされている。鎖国下の京都にどのようによつて来たのか知らない鸚鵡の足は、金の鎖で止まり木に繋がれている。「その鸚鵡の名はルル。体は緑、翼の先は薔薇色、額は青、そして喉は金色」と、これ以上切り詰めようがない単語で描写されるプロペールのルルは突然の死により、剥製となつてフェリシテの寝室の裝飾品の一つになる。そして有名なこの小説の最後で、死の床で意識を失いつつあるフェリシテの脳裏に、鸚鵡は空に広がる巨大なイメージとなつて再び現れる。

この年末、コロナウイルスに家庭内感染から罹患することになった。高熱にうなされながら、世界が鎖国時代に戻つたかのようなこの数年、留学を中断させられた学生たちの対応をしてきた経験から、私がこのまま最期の瞬間を迎えようとすると、脳裏に現れるイメージは、鎖に繋がれた若冲の白い鸚鵡のイメージであるような気がした。体調の良い時には、若冲の鸚鵡の絵を眺めながらこの虚空の目に親しもうと何度も試みた。最期の瞬間に純白の鸚鵡が空に広がったとしても、驚き慌てることのないように。

(いとう たつや)

レオン・スピリアルト「めまい」

エリス俊子

女性が一人、切り立った階段のようなところを、そつと降りようとしている。小さな顔は、はつきりしないが、眼は遠くを見て、きりつと口を閉じ、思い詰めたような表情に見える。スカート裾をおさえながら、おぼつかない足取りで、一歩、下の段に。そして、おそらく、もう一歩。足は不自然なまでに細い。長く柔らかなスカーフが、風に翻るように、流れている。女の情念が燃え出ているようで、この絵に力強さを与えている。螺旋状にそびえる階段は、左上後方からの光に反射しているが、周りは暗く、夜の時間である。向こう側に、ほんやりと、黒ずんだ景色が映る。上方部の茫漠とした灰色は海だろうか。下方は黒々としており、女が降りていく先は、ただ漆黒の闇。深淵というべき深さもない。

あと一段は降りられるかもしれない。でも、もうすぐ先にある急傾斜に、身体を支えることができなくなつて、真っ逆さまに転落し、この静謐な空間に、声のかたちを成さない叫び声かゆきわたつて、やがて、すべてが沈黙に包まれる。

黒インクと鉛筆で描かれた一枚。ベルギーの画家、レオン・スピリアルトの一九〇八年の作「めまい」である。ちょうど二十年前、二〇〇三年の展覧会で出会ったとき、私は、絵の前に立ち尽くして、動けなくなつた。この静けさ、この孤独。でも怖いわけでもない。ひんやりとした空気を感しながら、無音の階段を一歩、一歩。その感覚が、直接、心臓に届いた。オーステンダの港町で育つたスピリアルトの絵には、海がたくさんあるが、ほとんど人がいない。併せて、誰もいない街並み、先の見えない道路、どこかよくわからない空き地のような風景が数多くある。鮮やかな色は少なく、ほとんどがくすんだ黒、青、茶色。絶壁のような砂色の堤防風景は、私がいつだか夢で歩いた、遠い記憶の土地に酷似していて、衝撃を覚えた。

虚飾と、世俗の約束事のすべてを削ぎ落としたところに潜む、心の奥底にある風景。一人、生きることの足取りの不安定は、無言の死に支えられて、清々しくさえる。あと一段、降りてみる。

(えりす としこ)



ユディトとクリムト

太田恵雄

「どう？」見る者に何かを問いかけている。恍惚というのか、官能的、倒錯的というのか、表現力の乏しい凡人には適当な言葉が見つからない。今風というならドヤ顔か。この題材は多くの画家が描いているようだ。旧約聖書外典に登場する女性「ユディト」。彼女の住むユダヤの町ベトリアにホロフェルネス将軍が侵攻し、町は陥落状態にあった。そこでユディトが敵陣に赴き、ホロフェルネスの寝首を掻いて持ち帰るという物語を描写したものだそうだ。

二〇一七年の夏、ドイツとオーストリアに家族旅行をしたときの最終訪問地がウィーンであった。さすがに歴史豊かな都市という印象で、それまでのドイツの街とは雰囲気は違っていた。シェーンブルン宮殿は広大な庭園を有し、建物や園内はきれいに保存されていて、多くの人が訪れていた。

この宮殿近くのベルヴェデーレ宮殿オーストリア絵画館にこの絵は収蔵されている。グスタフ・クリムトの作品だ。何の素養もないままに見たこの女性の表情が強烈に印象に残った。右手の先にあるのは目を閉じた男性の頭で、顔が半分だけ描かれ、物語を想起させる。だがこの絵の主役は間違いなく女性の表情だろう。

絵画館には他にもクリムトの作品が多数収蔵されている。代表作「接吻」、「女の三代」、そして名前はわからないが女性二人が寛いだ姿でこちらを見ている作品などを駆け足で鑑賞した。これらの作品の女性は「ユディト」とは違い、非常に穏やかで柔らかな表情をしてどこか温かい。好みとしてはこちらの方が上かな。

人生最初のヨーロッパ訪問はイギリスだった。歴史は中世から脈々と続いていくのだなと肌で感じながらロンドンの街並みを歩き、ナショナルギャラリーで巨匠たちに出会った。また、最近東京で開催されたメトロポリタン美術館展でも著名な画家の作品を見るなど、機会あるごとに絵画鑑賞を楽しんでいる。本物を見たという一種の満足感はあるが、絵画でこれほど強く印象に残ったものは他にはない。クリムトの名前はこの旅行で初めて知った。これからは好きな画家として真っ先に挙げることにしよう。いつものように絵がプリントされたグッズを幾つか買って来た。コースターは今も仕事場で愛用している。

(おおよた しげお)

私の好きな絵

——モネ「ロンドン国会議事堂」

岡田 新

忘れられない一枚の絵がある。モネの「ロンドン国会議事堂」だ。ビッグベンと呼ばれるこの議事堂は、中世のゴシック建築風に建てられている。だが実は決して古色蒼然たる建造物ではない。確かにウイリアム2世が建てたウエストミンスター宮殿の一部が残ってはいる。今も女王の通夜や戴冠式に使われる。だが殆どは一八三四年の大火で消失した。(ターナーがこの大火を描いている。大火の後ゴチック様式を真似て再建され、一八六七年に全体が完成。モネが描いた一九〇一年には、まだ築40年足らずだった。因みに現在の議事堂は、ロンドン大空襲後寸分たがわぬ形で再建された戦後の建物だ。わざわざ古そうに立てるというセンスに、「伝統的支配」(ウエーバー)の残影を感じる。

だがモネが興味をもったのは、重厚さを装った建築ではない。モネが描いたのは霧の中で陽光の中に浮かび上がるシルエツトである。主題は、霧と光の戯れであり、国会議事堂はいわば引き立て役だった。絵の具を混ぜると黒になるが、光を混ぜると白になる、ということを利用して筆触分割。この技法を駆使して写真のような明るい画面を作り出す。それが印象派の出発点だといわれる。だがそのような技法で描けば、微細な画素で対象を連続的に表現することはできない。こうして写真を目指しつつ、決して写真ではない絵画が生まれた。形が霧の中に溶け、色の舞踏だけで描かれたビッグベンは、おそらく現実よりはるかに躍身の色であった。中世の建築を荘重に再現したイギリスの建築家の渾身の野心は、すっかり裏切られた。ビッグベンは、抽象の洗礼——あるいは現代の挑戦に晒されたのだ。カメラをいじるようになって何年かたつ。もっぱら花のクローズアップを撮っているが、印象派の辿った道を逆行し、絵画のような写真を撮ることとはできないものか。モネの傑作を思い浮かべながら、「ボケ」の写真を試みている。

(おかだ しん)

麦をふるう女たち

木内 堯

ギユスターヴ・クールベの『麦をふるう女たち』。この絵を初めて見た日のことをよく覚えている。見たと言っても美術館で見たのではない。フランス留学中、米国の美術史家マイケル・フリードの講演を聞く機会があった。そのとき初めてこの絵を見た。それ以前にも画集などで見掛けたことはあったかもしれない。でもこの絵に気を止めたことはそれまでなかった。その日、マイケル・フリードはこの絵をプロジェクトクターで映して、ここに描かれているのは画家自身の姿であるかと、解釈を述べた。それを聞いて、まさかそんな見方があるのかと、視界が一気に広がるような感覚を味わったことを覚えている。たしかに、床に敷かれた白い布は画布のように見えるし、左手の女性が手にしている白い皿はパレットのようだ。さらに、時代錯誤を承知で言えば、中央の女性が行なっているのはまるでアクシヨン・ペインティングではないか。

その一方で、この絵には観る者を画面の中へと誘い込むような不思議な力があると思う。ずっと見ていると、まるで自分が麦をふるいにかけているような、奇妙な感覚に捉えられる。このような錯覚が生ずるのは、人物が後ろ姿で描かれているからに他ならない。人の後ろ姿を描いた絵画には、独特の力がある。たとえば、フリードリヒの『窓辺の女』。あの絵を見ていると、自分も絵の中の人物と一緒に、窓の外の風景を眺めているような気持ちになる。クールベの絵の場合、観る者は絵の中の人物に一体化することで、間接的に画家にも一体化すると言えるだろうか。



『麦をふるう女たち』は、ナント美術館に所蔵されている。保存状態が悪いため、他の美術館などに貸し出されることはなくしてないという。フランス留学中、この絵を見るためにナントへ行こうと思いつつ、結局機会を逃してしまった。複製技術がどれほど発達しても、美術館で本物の絵を見る経験は別物だろう。いつか、ナント美術館へ行ってみよう。いや、行かなければならない。本物の『麦をふるう女たち』に出会うために。
(きのうち たかし)

『戦艦テメレル号』と共に見る遷り変り

後藤希望

何かと思い出しられない絵がある。ジョゼフ・マロルド・ウィリアム・ターナー作の『解体されるために最後の停泊地に曳かれてゆく戦艦テメレル号』だ。一九八九年、ロンドンのトラファルガー広場にあるナショナル・ギャラリーのルーム三四を訪れ、風景画の解説を受けたロンドン大学の授業で出会った。同じ部屋に展示されているコンスタブルやゲインズバラの田園風景作品とは異なり、ターナーの作品は、機関車を描いたもの以外、水面に艦を空をテーマにしている。七つの海を制した大英帝国の象徴だった軍艦が、技術と産業の発展により、その主役を鉄道に譲っていく狭間をルーム三四のターナーの作品で認識したことで、鮮明な記憶として残った。二〇〇五年、BBCラジオ四が『英国内の美術館にある最も偉大な作品は?』という世論調査を実施。『戦艦テメレル号』が一位に選ばれたという記事を目にした時、暫くぶりに思い出した。

イギリスで学んだメディア論に頻りに登場した映画『七シリース。二〇一二年、劇場公開された『スカイフォール』のシーンに『戦艦テメレル号』が現れた。『世代交代』の暗喩のごとく、覇気に欠けるジェームズ・ボンドが若きQとルーム三四のこの絵の前で出会う。このシリーズ生誕五十周年記念作で、ジュディ・デンチが演じてきたボンドの上司Mが死に、M I六が刷新され『世代交代』する。新上司Mのオフィスに〇〇七が訪れる場面では、ふたりが対峙している真ん中に、現役時代のテメレル号と戦艦ヴィクトリー号が描かれている絵画が映り込んでいるのも興味深い。



二〇二〇年、デザインが新しくなった二〇ボンド紙幣の裏面には、ターナーの肖像と共に『戦艦テメレル号』が描かれていると知った。紙幣にはエリザベス女王の肖像も用いられている。今年、その女王が逝去。国葬に参列しなかった他国の首脳から、イギリス連邦制度の変容を再確認した。そして、新国王チャールズ三世に卵が投げつけられた瞬間をニュースで見た時、『世代交代』、『遷移』を表わしている『戦艦テメレル号』を思い出した。
(ことう のぞみ)

イギリスで議会制民主主義を思う

小堀慎悟

最初に白状しておく、私にはてんで絵心というものがない。気が向けば近所の美術館に行くこともあるが、大抵は月並みな感想を抱いて帰ってくる。そんな私でも、二〇一九年の春から約一年間イギリスで在外研究を行っていた間には、しばしば各地の美術館を訪れた。イギリスでは公立の美術館や博物館に無料で入館できたので、観光にもってこいだっただけである。まずは拠点としていた都市プリストルの美術館を訪れたのだが、そのエントランスに飾られていたのが、バンクシーの「退化した議会」(Devolved Parliament)であった。

この作品はもともと、二〇〇九年にプリストル市立美術館で公開された。そして、当初のブレイクジットの期限であった二〇一九年三月二十九日からサザビーズのオークションにおいて九八七万九五〇〇ポンドで落札される十月三日まで、再び同美術館に展示されていたのである。バンクシーの名前は当然知ってはいしたが、社会風刺やユーモアのあるパフォーマンスで話題の覆面アーティストくらいの認識しかなかった(彼がプリストル出身と知ったのもその後しばらくたってからのことである)。しかし、私はその後度々この美術館を訪れては作品の前に立ち止まり、あれこれと考える日々を過ごしたのだった。

この再展示に合わせて、バンクシーは「Laugh now, but one day no-one will be in charge.」(今は笑えばいい、いつかだれも責任を取らなくなるけど)とコメントしたという。猿の姿をした議員たちが庶民院で議論する様子を皮肉たっぷりに描くこの作品は、「議会主権」といわれるイギリスでいかに議会に対する不信感が高まっているのかを嫌というほど伝えてくれる。それでは、議会から国民へと主権を取り戻せば問題は解決するのかもしれないとさえいえないだろう。当時の首相デーヴィッド・キャメロンが起死回生の手段として実施した国民投票こそが、ブレイクジットを決定づけたのだから。「どうすれば私たちは議会制民主主義を信じることができるのか?」私は逆に、この作品にそう問いかけられているような気がしてならなかったのである。

(こほり しんじ)

Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band

佐藤雄大

1980年代後半からコンパクトディスクが音楽のメディアとして主流となり始めるまで、ラジオやレコードが新しい音楽を聴く大切な手段だった。インターネット (YouTube) もサブスクリプションもない中、新しい楽曲はまずラジオで紹介され、毎週土曜日午後の邦楽、洋楽のトップテン番組がとても重要な情報源だったとも言える。3年ほど前大きく話題となったQueenの人気ナンバー「Don't Stop Me Now」を小学校6年生の時新曲として聞いたのもラジオ番組だった。

そういうラジオでの放送を経た後(あるいは「シングル」で様子をつかっていた後)、満を持した形で発売されるのがレコードの「アルバム」だ。レコード会社にとってもアーティストにとっても大切な発表形態であり、リスナーにとっても待ち焦がれるものだった。そしてその「アルバム」を彩るのがジャケットとなる縦横30cmの「アルバムジャケット」である。このジャケットはその後のCD(縦横12cm)でも当然受け継がれたものの、小さすぎて、アルバムを彩ったインパクトがなくなることが懸念されていたが、見事にCDではそのインパクトを無くしてしまった。さらにその後のインターネットベースの発表形態でもレコードアルバムではかならず話題となっていたジャケットが話題となることはなくなつたように思われる。

ではそのレコードジャケットのインパクトとは何か? そのことを考える上でこのジャケットでも時代を牽引したThe Beatles 特にSgt. Pepper's Lonely Hearts Club Bandのジャケットが参考になる。彼らはそれまでの慣行を無視し、ジャケットに「意味」を持たせていた(同年発表された Velvet Undergroundの通称「バナナレコード」もそうであるが、例外その意味はあまりよく分からないものが多いが、ただしそのジャケットの「絵」自体がアルバムの重要な要素として語られるようになったことは間違いないことだが、アルバムを単体で聞くことが普通となった現在ではあまりないことだが、アルバムを聴くとそのジャケットが脳裏に浮かんでくる。これは「絵」というイメージの持つ大切なインパクトで、Lucy in the Sky with the Diamondsを聞くとSgt. Pepper'sのジャケットが思い出される(反対も当然ある)ということがCD以前の音楽を彩っていた。

(さとう たけひろ)

アッシジの聖フランチェスコ

白井史人

大学院生の頃、ローマでの学会発表を終えてから数日間、あてもなくイタリアを旅したことがある。フィレンツェを經由してヴェネツィアで帰りの飛行機に乗るところまでは決まったが、残りの一日は空白のまま。結局七月の灼熱のローマを発って、鉄道でアッシジへよることにした。

目当ては、当地の聖フランチェスコ聖堂だった。世界遺産に登録されているこの聖堂には、アッシジで生まれ、フランシスコ会の始祖となった聖人フランチェスコの生涯を描いたフレスコ画が残っている。安宿に荷物を降ろして街はずれの教会まで歩くと、観光地然とした首都の喧騒からも解放されて久しぶりの静けさに包まれた。

建物の外観は極めて簡素。ひんやりとした聖堂の内部では、一連の壁画『聖フランチェスコの生涯』が、夏のヨーロッパの長い夕暮れの光にほの暗く照らされている。

この連作が西洋近代絵画の祖ともいわれるジョットの作かどうか、という点は疑問が残されているようだ。ジョットや同時代の作品を見たのもその時が初めてではなく、人物のリアルなフォルム、ダイナミックな構図、さらに鋭くぶつかりあう視線など、その革新性はひと通り理解していたつもりだった。しかし、美術館の均質な空間で見た彼らの絵画とはまったく異なる印象を受けた。壁画を見つめてその生涯をたどるうちに、ヨーロッパの中世と近代を形づくった聖人や画家たちが実際にこの地に生きていたのだ、という事実におののかざるを得なかった。伝統的な手法では描き切ることができないその奇跡を、いかに「いま、ここに」よみがえらせるか——そんな、死に抗うような西洋近代絵画の途方もない挑戦を、あらためて突きつけられた気がしたのだ。

宿への帰り道、ローマから悩まされていた頭痛も気が付けば収まっていた。軽い熱中症だったのだろう。これも靈験あらたかなる「奇跡」かしら、とうそぶきつつ飲んだcaffè freddoの苦みとともに、聖堂に浮かび上がるフランチェスコの姿はいまも臉に焼き付いている。

(しらい ふみこ)

オランダ人画家が「創造」した南アメリカの風景

鈴木 茂

広大に開けた平原とサトウキビ畑。左右に描かれた背の高い植物、彼方で地平線がかすんだ空に溶け込む。中央には製糖所や教会が配置され、奴隷や先住民などの人影が動いている。一七世紀オランダの画家フランス・ポスト(一六〇四—一六八〇)の多くの風景画に共通する構図である。

ハプスブルク王朝のスペインから独立したオランダは、一六二一年に西インド会社を設立して、カリブ海で銀を積んだスペイン船を襲撃する一方、当時、スペイン王国の一部となっていたブラジル北東部の占領に乗り出す。そして、一六三〇年、砂糖生産の中心地ベルナンブーコを陥れ、一六五〇年代半ばまで北東部一円を支配することになった。

オランダ西インド会社は、一六三六年、オランダ総督とゆかりのあるヨハン・マウリッツ・ナッサウ・ヘン伯爵をオランダ領ブラジル総督として招聘する。ヨハン・マウリッツは医者や天文学者とともに二人の若い画家を同行し、支配下に収めた異国の住民や動植物、事績や風景を描かせた。ポストはヨハン・マウリッツの遠征に同行して戦闘や風景をスケッチし、新築された総督の館(フライブルク)に飾る一八枚の油絵を描いた。一六四四年に帰国後、生地ハーレルムに居を定め、ハーグのヨハン・マウリッツ(現マウリッツハイス美術館)のために風景画を描き続けるとともに、総督の業績を顕彰する豪華本の銅版画制作にも携わった。その後独立し、持ち帰ったスケッチをもとに、数多くの作品を残した。

ブラジル時代に制作した一八一点の油絵は、ヨハン・マウリッツが晩年にフランス国王ルイ一四世に贈呈したため、現在、四点がルーブル美術館に所蔵されている。さわめて写実性の高い風景画で、歴史的な史料価値も高い。ただし、一八六〇年代に入ると、エキゾチズムを期待するヨーロッパの顧客の要望に応えるためか、大蛇やアルマジロなどの熱帯の要素が組み込まれた空想的な構図に変化していった。写真の作品「製糖所」(一八六〇年、ロッテルダム、ボイマンス・ファン・ペーニンゲン美術館蔵)の左手前にも大蛇が潜んでいる。

(すずき しげる)



「サン・ベルナル峠を越えるポナバルト」

竹下裕隆

拙宅の玄関脇廊下に、アンデイ・ウォーホルを思わせる「腕組みするマリリンモンロー」の絵が飾ってある。スケッチブックに描かれたその絵の作者F君は、私が担任したクラスの卒業生だ。彼は、美術系の学校に進学後、アメリカの美術学校に留学した。帰国した際に、友人と一緒に拙宅を訪ねてくれ、私にその絵をくれた。折角なので、額縁に入れて飾ることにした。その彼を担任したのは、彼が高校三年の時である。

その年度初めの始業式の朝、彼はパーマをかけた「かつら」を被って登校してきた。面白がった生徒指導部長に始業式後の全校生徒の前で壇上と呼ばれて叱られ役を演じ、かつらを取られて笑いをとっていた。それでも、どこか飄々とした彼は、いつもつまらなそうな顔をしていた。

私のクラスでは、日直当番に「雑記帳」の記載を課していた。「何でもいい。何も書くことがなければ絵でもマンガでもいい。自宅を持ち帰って書いて翌日提出するように」というルール。最初は面倒くさがる生徒も、自己紹介から始まり、二廻り目からは少しずつ「素顔」を見せ始める。誰でも周りに知って欲しい自分を持っている。それが見えた瞬間が楽しい。F君は絵を描いてきた。それが、抜群に上手い。正直、驚いた。彼に体育大会のクラス応援画の製作を任せることにした。さて、何を描くか。

私の世界史の授業では、その授業を象徴できるような絵や写真を多用した。ナポレオン登場の際に、アルプス越えをする馬上のポナバルトを使用した。彼はそれを描くことにした。幅四メートルほどにつきぎ合わせたB紙一面に、彼はハンドフリーで馬上のポナバルトを描いていく。ほぼ、友人と二人で仕上げていった。何かブブツッ言っていたがよく覚えていない。そして、完成したその応援画は、最優秀賞を取った。

数年前に彼から電話があった。実家のお寺が経営する幼稚園の園長を務めていて、相談事であった。その際、以前もらった絵のことを話すと、「先生、あれは適当に描いただけだから、もっといいのをあげるよ。」と喜んでくれた。拙宅に届くのを、気長に待っている。

(たけした ひろたか)

チュルリヨーンニスの楽園

沼野充義

海辺にたたずむ天使たち。天使たちは青、緑、黄といった、柔らかいパステル調の色の羽根を生やし、羽根を生やしていない人たちとともに海辺の草原や、海に向かって降りていく幅広い階段に立っている。海辺に緑のベルト状に伸びていく草原には花が咲き乱れ、大きな白い蝶が飛び交っている。いや、あれは蝶ではなく、魂ではないのだろうか。空には白いもくもくとした雲が浮かび、海は穏やかに広がり、海上には三羽の鳥も見える。形象はあくまでも具象的だが、細部まではリアルに描かれず、二次元的にも見える。宗教的というより、むしろメルヘンの。これは死後の世界なのか、それとも人の心をいやす異世界なのか。

ミカヨロス・コンスタテナス・チュルリヨーンニス Mikalajus Konstanthas Čiurlionis (一八七五—一九一三)の「天使たち(楽園)」(一九〇九、テルベラ、国立チュルリヨーンニス美術館所蔵、カウナス)という絵だ。チュルリヨーンニスは美術と音楽の両方で活躍した、リトアニアが誇る国民的天才である。作曲ではシェーンベルクのセリー技法を、美術分野ではカンディンスキーの抽象画を先取りする革新的な作品を生み出した。ヨーロッパの「辺境」の出身者でありながら、世界文化の最先端を切り開いた。

短い生涯に、二百数十点を超える音楽作品(交響詩「森にて」と「海にて」)の他、約一七〇のピアノ曲、六十の合唱曲)と約四〇〇点の絵画作品を残した。

中東欧を含むヨーロッパの文脈では、彼の芸術は象徴主義の流れの中に位置づけられる。ただし、その芸術の一番深い靈感の源は、リトアニアの民族的伝統だった。画家としての代表作は、「十二宮」、「春のリトアニア」などの連作や、「城のおとぎ話」など。幾何学的模様を使った抽象画の先駆的な作品のほか、リトアニア民族の神話的モチーフが強く感じられる作品も多く、リトアニアならではの「宇宙的ナリズム」が脈打っているように感じられる。「天使たち」を満たすゆったりとした音楽的雰囲気もまたそのようなものではないか。

(ぬまの みつよし)



結核をどのように表象し想像するか

福田真人

一枚の絵をご覧ください。どんな病気が？

瘦せた女性と太った男性。男性がどうもこの女性に言い寄っているらしい。結婚を申し込む、愛の告白である。しかし、この二人の組み合わせの前を去って行く後景の二人は、この前景あるカップルよりも違う。瘦せた男性と肉感的な女性が、既に去った流行を代表しているのかも知れない。

この彩色された絵の、細く瘦せた女性。色は白く(蒼白)、頬は瘦けて頸は長く肩幅は狭く、下半身も瘦身のままである。この絵の標題は「水腫症の男が肺病の女に求愛」(Dropsy courting Consumption)である。この絵は一八一〇年十月二十五日に版画として印刷された。

それでも病気に罹った二人は、いかにも健康そうに見える。しかし病名が時代に相応しいものであるらしい。瘦せて虚弱で、すぐさま咯血をする女性、それに夕方からは盗汗と微熱に苛まれる。

さあ、もう一枚を見てみよう。豪壮な自宅で、大仰に医師の診察を伺いながら、椅子に腰掛ける人物は診察を待っている。人物はこう言っている。「私は肺病に違いなさね」(Ah! docteur: je crois bien que j'ai suis poitrine!)と。私はバリとストラスブールでこんな絵に注釈をしていたのだが、聴衆からこの患者は女性ですよと注意を受けた。医師の今にも忌々しい表情は理解できた。差別的な言葉で困るのだが、この絵が示すことはつまり、肥満であること、それ以上に美しくない女性が医師から批判をされているのである、あなたには肺病になる資格がないと言わんばかりに。この女性は金満で肥満でもある女性に有るまじき姿、すなわち瘦身と美貌、蒼白を誇った時代から隔絶していると表現しているのである。

世界には老若男女、皮膚から背格好まで種々豊富な変化ある筈なのに、結核という疾病が示す傾向をこのように表現してみせたのである。男女の異事な対比を示したが、結局瘦せて美しい女性でなければならなかった。黄色でも黒色でも赤銅色でも、青褪めて戴かねばならなかった。

初めて肺病結核に罹患する人たちは、急性伝染病に艶れるが、やがて慢性になると、二、三年は生き延びる。色白の蒼白をその皮膚の色に浮かべながら、死の宣告を受け、なお美しく映えて。こんな病気は他にはない。

(ふくだ まひと)



「私が好きな絵」を描くこと

真崎 翔

高尚な文化芸術には縁遠い庶民的な人生を歩んできた自分は、このコラムの題目で恐らく期待されているであろう芸術作品がパッと思いつかない。困っている。もちろん、人並みに、『モナリザ』や『ゲルニカ』などは知っている。ただ、知っているだけで、好きかと聞かれれば、そうでもない。鳥獣戯画なんかはとも好きで、画集を買ったこともあるほどだが、語れるほどの知識がない。「あのふにゃふにゃしたかわいいうツチが好き」という浅はかな理由など、ここで披瀝すべきでない。他方で、漫画について語るわけにもいきまい。文化を専門としている方ならまだしも、畑違いな私なんかは漫画について語ったら、漫画ばかり読んでいるという誤解を招くに違いない。仕方がないので、個人的な話をする他ない。「私が好きな絵」を描くこと」と題目を拡大解釈して、この難曲を乗り切ろう。

絵画を鑑賞することあまり馴染みはないが、昔から絵を描くことが大好きだった。なので、絵を描くことが得意ですと言える程度には描けるつもりである。とは言っても、落書きの域を出ない絵なのであるが、それでも何度か小学校のコンクールで入賞したことがある。子どもの頃から、クラス行事などがあるたびに、私は絵を描くことで貢献してきた。絵を描いていると、周りに友だちが集まってきたものだ。海外で人気があるマンガのイラストを描くことで、外国人と打ち解けることがあった。バックパッカー一つで言葉の通じない国々を放浪していた頃は、絵による筆談が役に立つこともあった。まさに、「芸は身を助く」である。口から発せられる言語と同じように、手と紙とペンから生み出される絵もコミュニケーションのツールなのだ。

余談ではあるが、そのように考えると、名古屋外国語大学と名古屋学芸大学が同居する日進キャンパスは、コミュニケーションについて幅広く捉え、学ぶことのできる場所であると言えよう。なんてバランスの取れたキャンパス環境だろう！とわりわけ、日本語を学ぶアニメ好きの留学生にとって、日進キャンパスは楽園に違いない。

(まざき しょう)

「おまえの口に口づけしたよ、ヨカナン」

ムーディ 美穂

小学生の時、家に「絵で読む聖書」というようなタイトルの本があった。子ども向けに有名絵画を解説する形で聖書の物語を綴っていくという志向のものであった。絵があるので楽しく、わかりやすかったが、正直者が最後には得をする優しい日本昔話に慣れている心に、新・旧約聖書のストーリーは時に残酷で理不尽に映った。「一番強い印象を残したのは「サロメ」である。若く美しいサロメは、踊りを披露した褒美として、洗礼者ヨハネの首を所望する。生首を載せた盆を持ってこちらを見る美しいサロメの絵は小学生にはかなり衝撃的だった。と同時に不思議に思えたのは、サロメ自身の気持ち全くなからなかった。ヨハネを憎む母の言いつけとは言え、人の首を切ってしまうほど母に対して従順だったのだろうか。それとも、ただ残酷な性格だったのだろうか。その絵に描かれていたサロメの表情は幼く、あどけなく、心の中を想像することはできなかった。

オーブリー・ビアズリーの「サロメ」の連作は、オスカー・ワイルドの戯曲のための挿絵である。新約聖書とは異なるストーリーだが、そのうちの一枚が、子どもの時の私の疑問を解いてくれた。挿絵の中のサロメはなぜか宙に浮き、ヨハネの首を両手で掲げ、今まさに口付けしようとしている。その表情は、あどけなさとは程遠く、美しいがどこか狡猾で勝ち誇ったように見える。それもそのはず、預言者ヨカナン（ヨハネ）に恋い焦がれるも拒絶されたサロメは、彼の首を切り落として口づけし、今まさに思いを遂げようとするところなのだ。挿絵を見てから、戯曲を読む、という逆の順序となったが、原作を読み、もう一度挿絵を見て「そうでなくちゃ」と思ったのである。

ワイルドとビアズリーの関係はあまり良好ではなかったらしい。ワイルドは、浮世絵の影響を受けたビアズリーのスタイルが「日本的すぎる」と好まなかったそうだ。とはいえ、こんなにも妖しく、毒を持つけれど美しいサロメは他にいない。ビアズリーのこの挿絵を見るたびに、何かイケナイものを覗き見てしまったような気持ちにさせられる。



(むうでい みほ)

「TAKESHIMA」(二〇〇九)

愛知県蒲郡市

吉見かおる

私の好きな絵は「TAKESHIMA」という水彩画である。作者はルイス・スズキ・巖(一九二〇―二〇一六)、無名の日系アメリカ人二世画家。竹島は、愛知県蒲郡市のシンボルであり、大正・昭和期にはこの島の素朴な美しさに魅了された名だたる文豪たちも、向かいの海辺の料亭「常磐館」に滞在し、いくつもの名作を手掛けた地でもある(その跡地に「海辺の文学記念館」が建てられている)。青く煌めく三河湾にぼっかりと浮かぶ絵に描いたような島。その竹島に向かって対岸からのびる橋は「縁結び」で知られている。

スズキは一九二〇年にロサンゼルス「リトル東京」で生まれた。一九二九年に父親を不慮の事故で亡くし、母親と五人の兄弟姉妹と共に愛知県蒲郡に移り住んだ。ままならない日本語で苦労したからか、学校では絵を描くことが得意で、美術の先生に褒められたことが彼を救った。旧制中学に上がると、軍国主義に染まった教員と軍事訓練の日々に強く抵抗。「アメリカ帰れ」と揶揄され、大和魂の共有を許されなかったスズキにいつしか反戦思想が芽生えていった。一九三九年、画家を志して親族に見送られながら帰来する。その二年後、日米開戦を迎えると、ファシズムに抗して米軍に志願した。日本に残った二人の弟は日本軍として出兵することになる。スズキは戦時中の経験を自ら語ることはなかった。しかし二〇〇六年、日系アメリカ人三世で米陸軍中尉アレン・ワタダ(Ethan K. Watada: 一九七八)がイラク従軍を拒否して全米で大騒動になると、日系退役軍人を代表して「ワタダこそが真の米国人」と称し、精力的に弁護した。

晩年、スズキはパークレーの自宅に併設された小さなアトリエを定期的に一般公開し、ひっそり暮らしていた。そのアトリエに、私もお邪魔させてもらったことがある。近所の人が散歩がてらふらっと立ち寄る光景が今でも懐かしい。



「TAKESHIMA」はそんな彼の最後の作品である。そこには「二つの祖国」を生きた一人の人間の人生への問いかけと願いが込められている。日本人であり、アメリカ人であり、平和を願った一人の人間が生きた証が、そこにある。

(よしみ かおる)

Une image que j'aime de Simone de Beauvoir : Brassai (1944).
Simone de Beauvoir, café de Flore, Paris. Photographie, épreuve contact aux sels d'argent (8,5 x 5,9), BNF. Anne-Claire CASSIUS

Parmi les nombreuses photographies de Simone de Beauvoir, ma préférence va à ce portrait de Brassai, un photographe dont la série des graffitis m'a longtemps accompagnée, émerveillée. Il existe aussi beaucoup de clichés de Robert Doisneau de la grande dame attelée à sa tâche, concentrée, sérieuse dans différents cafés de la capitale. Mais l'œuvre de Brassai me semble plus forte et authentique. Il ne semble pas y avoir de mise en scène. Dans un coin du célèbre café de Flore où elle allait avec Sartre pour travailler à la chaleur du poêle installé en 1939, Simone de Beauvoir est absorbée dans ses pensées, concentrée, l'air grave, les yeux cernés, une cigarette à la main gauche et un stylo dans la main droite au-dessus d'une feuille blanche. Sur une assiette que frôle presque sa main gauche, une théière argentée est placée, laissant peu d'espace sur la table, juste assez pour des feuilles de papier et reposer ses avant-bras. Qu'est-elle en train d'écrire ? 1944, c'est l'année où elle décide de se consacrer entièrement à l'écri-



ture. Travaille-t-elle sa pièce de théâtre *Les Bouches inutiles* ou son roman *Le Sang des autres* qui sera publié l'année suivante avant de se lancer dans le projet fou du *Deuxième Sexe*? Pas de maquillage sur son visage, mais ses ongles sont peints et ses cheveux remontés en chignon comme une auréole autour de la tête. L'une de ses protégées, Violette Leduc, disait avoir été très impressionnée par cette femme concentrée sur son travail, chaque jour au café de Flore, le visage sans fard. Elle est tombée follement amoureuse de l'autrice qu'elle venait « déranger » dans ce célèbre lieu germanopratin. Beauvoir n'a pas encore 40 ans. La guerre va se terminer. Son regard est grave. Elle a vécu les deuils de la guerre. Elle n'a pas encore obtenu le prix Goncourt, ni connu les déchaînements provoqués par *Le Deuxième Sexe*. Ce qui frappe dans ce portrait, c'est qu'elle semble ignorer l'objectif de Brassai. Au moment de ce cliché, elle n'a pas encore publié le premier tome de ses mémoires, mais elle se livre déjà et offre l'image d'une personne rigoureuse et libre. Elle montre l'exemple d'un destin choisi, mais laisse voir aussi que la tâche est rude.

(カシウス アンヌ クレール)

クリムトのお休み前の『接吻』

Alessandro G. Gerevini



高校時代に修学旅行でウィーンを訪れた。父の葬儀が終わった数日後だったので、行くべきかどうかは大分迷ったが、最終的に行くことにした。ウィーンで過ごした時間の不思議な感覚はいまだに忘れられない。私の体は仲間に混じり、お洒落な中心街を歩き回っていたが、意識は別の次元にあった。今日のドローンのように、まるで高い所から私の体を俯瞰していた。

そんな中、ベルヴェデーレ宮殿のオーストリア・ギャラリーを訪れた際、頭も体と合体するきっかけがあった。我々のグループの前で歩いていた人たちが先へ進むと、金箔の輝きに包まれながら、巨匠グスタフ・クリムトの『接吻』が現れた。それまではつきりしていなかった意識はピリッと体中に走り、目の前にあった、抱き合っている二人に取りつかれたかのように、その絵に完全に圧倒された。背の高い男性は若い女性の頬に皺のある手を置きながら、彼女に永遠のキスをしていた。そして女性は目をつぶったまま、気持ちよさそうにそれを受け取っていた。

あの当時の私にとって、エロチックな様子を全く感じ取れなかったせい
か、その無邪気な愛情の表現だけに飲み込まれ、ずっとこらえていた涙を
一気に流してしまった……。

帰りに、『接吻』の二人をもっとじっくり見つめたいと思い、ミュー
ジウム・ショップに寄り、ポスターを購入した。そして実家に帰った後、
自分のベッドの真上に貼った。イタリアの普通の家だったら、通常、守護
天使や幼いキリストを抱く聖母マリアの絵を貼る位置に。

そしてその日から長年にわたって、毎晩、クリムトは無意識の世界へ私
を導いてくれた。おかげで、目を閉じると、輝かしい思い出を交えながら、
多くのキスシーンの夢を見た。私がキスをする側に立っていることもあつ
たが、される側の方が多かったかもしれない……。
何回も繰り返してきた引越した時も、ベッドの
上に『接吻』のポスターを必ず貼った。私の「安心
毛布」のような存在で、それがないとゆっくり眠れ
ないほど、実に大事な絵となった。

(アレクサンドロ・G・ジェレヴィーニ)

Art is my GPS

Camilo Villanueva

It is the eyes. The way they look into you. They are white and are like laser beams into your soul.

“Untitled (Cadmium)” is a large (168 cm × 152 cm) oil painting by Jean-Michel Basquiat (1960–1988). Painted in 1984, it is on permanent display at the High Museum of Art in Atlanta, Georgia. What strikes you are the white eyes. They contrast with the strong cadmium coloring which the painting’s name comes from. Besides its grand size, it is impressive in its general simplicity. This comes from the colors (a heavy use of cadmium red over a yellow underpainting) and the main object being depicted (a legless man—a torso—with halo who seems to be looking into a mirror, alongside some praying Egyptian stick figures). *And the stabbed heart ... oh the heart!* But the painting’s gruesome imagery and bold coloring is balanced with playful drawings—the numerous stick figures and the curlicue navel.

In 1992, I had dropped out of university with only one more semester to graduate. Like many young people, I became dissatisfied with where my life was going. I was rudderless, and soon I was in a pronounced depression. I lost touch with reality. I did not know it, but I was numb. One day, I took the train into the city to walk around and take photos. I stumbled into the High and used my last few bucks for admission. I came across the painting. Not knowing what it was that I was feeling—*because*

suddenly I was feeling something—I looked quickly and walked on. But I returned to it and sat on a soft bench in front, a few meters away, and let the painting seep into me. Instead, it took me in.

What happened was a two-hour journey. It felt like I went into the painter’s life and then I explored the history of all our people. Whatever the painting is about (*there is a Christ-like torso whose heart is taken out and stabbed with a cross, for chrissakes!*) does not really matter. So the background glows red like the world ending in fire. So the Egyptian praying figures are scraped into the painting like they are knives etching our skin. Whatever the picture represents visually, that day “Untitled (Cadmium)” by Jean-Michel Basquiat manifested into something visceral inside me: I could finally feel again.

I went home and got together whatever ink pens I had and started drawing. Each drawing was a roadmap home. I finished university in 1994. Art will always be my GPS. It started that day at the High in 1992 when I was rudderless. No longer so, I’m now navigating home.

See the painting here: <https://high.org/collections/untitled-cadmium/>

(ピラスエバ カミール)

The Young Lady with the Shiner

Mathew White

One of my favorite paintings is “The Young Lady with the Shiner” by Norman Rockwell. Norman Rockwell was a famous American illustrator and artist. His paintings were used on the covers of *The Saturday Evening Post*, an American magazine, and these pictures usually told stories about life in the United States. In fact, I have a book containing his works in my office that I sometimes share with students to talk about American culture.

“The Young Lady with the Shiner” is a painting of an American schoolgirl with pigtails and a black eye, sitting on a bench outside of a principal’s office. Although the girl’s hair and clothes are disheveled, and she is sporting this black eye, she has a goofy smile on her face. We can assume that she got the black eye in a fight, and it seems obvious that she is proud of how she did in the fight. My guess is that she took on a boy who was a bully, and she is gloating in her triumph. Where is the bully? I can imagine that he is still in the nurse’s office, or he was sent home crying.

I should mention that there are two other characters in the painting who add to the story. The door to the principal’s office is slightly ajar, and a woman who appears to be the secretary is talking with the principal. They look rather perplexed

as to how to deal with the young lady, who obviously does not feel that she has done anything to be ashamed about. She also does not seem to be worried about whatever punishment she might receive.

Each time I see this painting I smile. I know the story was invented. I know that the girl who was used to model for the painting did not actually have a black eye. However, I love the concept and the story that the painting conveys. I am proud of that young lady and the imaginary battle that she fought.

I hope you will make time to see “The Young Lady with the Shiner” and other works by Norman Rockwell, a great storyteller of American everyday life.

(ホワイト マッシュュー)